

「種」を芽吹かせた10年

福島の話をししましょう。10年前東京電力福島第1原発事故でふるさとを失ってしまった人たちがいることは「帰還困難区域」ということばでも知っていることです。この10年福島では、「よい未来を子供たちに」をスローガンに取り組まれていることがある。高校生社会貢献活動もその一つである。感染症対策の石鹸づくり・富岡町のシンボルである桜をイメージした「さくらタピオカ」づくりなど被災した経験から、今度はだれかを支える側に回れることを伝える活動が始まっている。

この活動は、1995年の阪神大震災を経験した当時高校3年生で現在福島大学准教授の願いが種をまき芽吹かせた。自宅が被災して「勉強している場合か」という事態にあったときに「こういう時こそ学ぶんだ。形あるものが壊れることがあっても、人が人に伝えることっていうのは壊れないんだ」と教えられたことを心に刻んで取り組んできた。

活動参加者の願いは、原発事故や、それに伴う差別を乗り越え、みんなが胸を張って「福島出身です」といえるような社会づくりだという。

熊本地震から5年の現在

熊本・大分両県で276人が2016年の熊本地震から5年が経過した。熊本では、現在も418人が仮設住宅での暮らしが続いている。損壊した熊本城の映像は今も記憶に残る。天守閣の復興は完了したが、石垣などを含む全体の復興は2037年ごろになる。熊本に在住する卒業生を介して熊本支援も継続している委員会としては、復興の進捗を見守り続けていきたい。

知ってたかな？「震度と揺れ」

日本列島に住み続ける限り、地震はどこにいても、いつでも起きると考えておくのが当たり前。しかし、現在の科学では地震予測はできない。最近も地震発生がよくあり、将来必ず来るといわれる大地震を想定して、防災知識を増やしておきたい。そこで、今回は震度と揺れの状況について紹介する。

震度0	揺れを感じない	震度5弱	大半の人が恐怖を感じものにつかまりたいと思う
1	屋内で静かにしている人で感じる人もいる	5強	物につかまらなないと歩けない。物が落ち倒れる
2	屋内で静かにしていれば大半の人が感じる	6弱	立ってられない。物が移動・落下倒壊する
3	屋内にいるほとんどの人が感じる	6強	這わないと移動できない。地割れ・木造物倒壊
4	ほとんどの人が驚き、吊り下げ物は揺れる	7	耐震性の高い木造物・耐震性低い鉄筋建造物倒壊

震災10年、詠み続けた軌跡

3653冊
〈塔短歌会・東北〉震災詠の記録



塔短歌会・東北編

先の5月7日付け朝日新聞の文化欄で「震災10年、詠みつづけた軌跡～東北ゆかりの24人 日々紡がれた1273首」と題して、『3653日目〈塔短歌会・東北〉

震災詠の記録』（荒蝦夷）が紹介されていた。これは東方ゆかりの歌人たちが、東

日本大震災の発生直後から詠みつづけてきた短歌をまとめたものだ。24人の歌人

による1273首のほか、「地元にいるからこそ原発のことは詠みにくい…」といった胸の内を明らかにした座談会

やエッセーも収められている。会員相互への信頼を土台に、日々の暮らしの中から紡がれた記録が綴られている。

「それでも朝は来ることをやめぬ泥の乾るひとつひとつの入り江の奥に」まとめ役を担った歌人梶原さい子さんが震災から3ヶ月後に詠んだ作品。記事には、彼女の思いが切々と綴られている。宮城県大崎市在住で、家族は無事だったが気仙沼市にあった実家が津波に襲われた。当時は震災を人ごとのような論評や、奇をてらうような短歌の作品にも胸を痛めていたようだ。

編／塔短歌会・東北
発行日／2021年3月2日
体裁／四六判並製・480頁
価格／2700円＋税
ISBN 978-4-904863-71-8

福島市の三浦こうさんは、「原発を詠むのはむずかしい」としながらも、震災

後の2年目の作品で「水底に鎮もる瀬をかき乱すように賠償金をもいらぬ」と詠んだ。

歌人メンバー24人の住まいは、宮城、秋田、福島、東京等ばらばらで、世代も20代から80代までと幅広い。

ボランティア先で東北に関わった縁で参加した方もおられる。「私には詠めない」、「あまり被害を受けていない

私に、詠む資格があるのだろうか」、震災直後は「短歌なんて詠んでいていいのだろうか」という葛藤のなか、

懐中電灯の灯りのなかで紡ぎ出された言葉の一つひとつが綴られていった。

日常の暮らしの中で、なんらかのかたちで寄り添っていけたらと思いつつも、埋もれて忘れがちとなる自分がある。「記憶を風化させまい」と詠み続けていく、とにかく続けていく・そのことの意味と熱意をあらためて考えさせられる内容だった。

近所に潜む危険をチェック「防災さんぽ」

～登校途中で通学路チェックを～

コロナ禍で防災訓練などが軒並み中止になっていることもあり、自宅の近くで、密にならずにできる防災活動としても注目されているのが「防災さんぽ」だ。地震などの発生後、避難所まで行く経路に危険な箇所はないか、どのルートを通れば安全に避難ができそうかを考えながら行うものだ。

自宅周辺で、自動販売機や店舗の看板、屋根瓦や窓ガラスなどを見つけると、手元の地図シートにシールを貼りながら歩く。災害時には転倒や落下のリスクがあり、日常の風景に溶け込んでいるものが危険な物に変わることを意識しておく必要がある。

ところで、普段からハザードマップで地域の特性を知っておくことはこの災害の多い今日においては必須である。というのも、災害の種類によってチェックしておくポイントが異なるからだ。例えば地震であれば「倒れてくるもの」「落ちてくるもの」をルールに選ぶ。一方で、水害の場合は「河川や用水路に近づかない」ことが前提となる。余裕があれば、時間帯や時期を変えて、何度か「防災さんぽ」を経験しておくことをおすすめする。

防災さんぽのやり方



<https://www.asahi.com/articles/ASP4Z51F2P4QUTFL001.html>